

# 保育者の生きがい

## —戦後を生きた元保育者のインタビューの考察から—

松本 なるみ\*

Interviewing former nursery teachers active in the post World War II period in Japan, we researched and analyzed their reasons for becoming nursery teachers. Seventy percent of those surveyed said that they had not actively sought to be nursery teachers. However, among them were women who had worked for 50 years or more as nursery teachers, held the position of nursery director, or who had even established nursery schools themselves. By examining the life histories of these women, this research endeavors to discover how the women derived Ikigai (Life Worth Living) from their work, though they did not actively choose their profession in the beginning.

Key Words : 戦後, 保育者, 生きがい

### I. はじめに

終戦から5年後の1950年の国勢調査によれば、国内総人口は83,199,637人で、就業者数は33,328,963人、そのうち男性就業者数は20,622,217人（全就業者数の61.87%）、女性就業者数は12,706,746人（全就業者数の38.13%）と報告されている（法政大学大原社会問題研究所,2000）。また、女性総人口39,972,074人中の女子就業者の割合をみても31.7%であった。当時は、女性が職場で働くということが現在ほど一般的ではなく、自由に職業を選べる社会状況でもなかったと考えられる。このことは、筆者らが実施した、戦後1945年から1955年頃に保育者として働き始めた女性たちへの聞き取り調査の結果からも理解できる。2009年に聞き取り調査のデータのなかから、職業選択の要因について分析・考察を行った結果、保育者を選択した理由として、「軍需工場に行きたくなかったので」「家族が戦死し生きていくために」「結

---

\* 人間学部人間福祉学科

婚相手の実家が保育所を経営していた」「学校の先生に勧められて」など、積極的理由ではない者が7割を占めていた。戦後間もなく保育者となった彼女たちは、職業選択時において必ずしも明確な意思をもって職業を選択しているわけではないことが明らかになった（岩崎・松本,2009）。しかし、元保育者たちは、その後の人生において50年以上も辞めることなく働き、園長職に就き自分で保育所を設立する者までみられた。決して積極的とはいえない選択理由で保育者となった彼女たちが、どのようにして50年以上もの長きにわたり働き続けることができたのであろうか。そこで、ひとつの要因として、保育者という職業人としての生きがいに注目した。神谷（1980）は、生きがいの概念が、哲学や科学の重要な用語と異なる点は、日本人の生活の歴史のなかから生みだされた語であり、「生活的なふくみ」を持っているということであると指摘している。この「生活的なふくみ」をもつ生きがいについて研究を進めていくうえで必要なことは、仕事や生活の場で実際に生きている人びとが見出している生きがいを具体的な事実から検討することである。そこで、本研究では、戦後をたくましく生きてきた元保育者たちの語りのなかから「保育者としての生きがい」に焦点を当て、保育の道に進んだ職業人としての生きがいの特徴を把握し考察する。

## Ⅱ. 先行研究にみる生きがい

日本人は、言語化できないあいまいな部分をふくみながらも生きがいという言葉をごく自然に使っている。小林は、「生きがいという単語は外国語にはないが、しいてこれを訳せば、生きるに値すること、生きる価値、意味ある生存理由となろうか」と述べている（小林,1994:25）。Mathews（2001）の日米の比較研究によると、米国で「生きがい」に関する調査を実施する場合、「人生で最も大切なものはなにか」「あなたの人生で生きる価値があると思わせるもの」という質問をすると、日本で意味するところの「生きがいはなにか」という質問とほぼ同じ回答が得られるということが分かった。

見田（1970）は、日本で戦後「生きがい論」が盛んになったのは1960年代に入ってからだと言う。敗戦後の日本では、しばらくの間、多くの人びとは困窮する生活からどうやって抜け出すことができるかというようなことで頭がいっぱいであった。そのような時代において、生きがいは何か問うている余裕を持っている人はごく限られていたと考えられる。見田は、「生存の問題から解放されたときにはじめて、人はみずからの生存をふりかえってその意味を問うもの」（見田,1970:23）であり、生きがいについて「生きる手段が中心の問題である時代から、生きる目的が中心の問題である時代への、巨大な過渡期としての現代を性格づける、根源的な問いとして把握されなければならない」と述べている（見田,1970:23）。統計数理研究所の統計グラフから、1953年と1968年に実施された調査を比較してみると、生きがいは時代の変化、人びとの価値観の変化に伴いその中身も変化することが理解できる。例をあげると、戦前の「清く正しく生きる」「公につくす」という項目は戦後減少し「趣味に合った生活」「のん

きに日を送る」といった項目が明らかに増大している。また、東京では「仕事」の生きがい が 1 位を占め、地方では「家庭」や「子ども」が 1 位を占めているというように、居住地域や環境による違いもみられる。その他、サラリーマンと主婦、ホワイトカラーとブルーカラーなど、その人のおかれる状況や立場により生きがいの中身は異なってくるのである。

### 生きがいの基本的な条件

見田は、1963 年に実施された国民世論調査の結果から、「生きがいなし」「わからない」と回答した人びとの特性を検討したところ、最も目立っていたのが「無職」で次に注目したことは生活程度が「下層」に属する人々であるということであった。この結果の考察から、生きがいの基礎的な条件として、次の 4 つを挙げている。

- ①極度の貧しさからの解放
- ②未来を持つこと－未来とのかかわりのなかで現在の生が意味づけられること
- ③具体的な人間関係－人びととのつながりのなかで自分の生が意味づけられること
- ④仕事を持つこと－「つながり」と「未来」の媒体

見田（1970：120-125）

宮城は、「生きがいとは、動物的・本能的に生きているためのものではなく、よく生きて行くというイメージを伴った人間的欲求である」と述べている（宮城,1971:19）。神谷（1980）は、生きがいという言葉について、日本語固有のもので、日本人の心のなかに違和感なく定着した言葉であると言う。また、それは日本人が生きていく目的や価値を問いながら生きてきたことを示すもので、「ただ漠然と生の流れに流されて来たのではないことということがうかがえる」と述べている（神谷,1980:10）。では、具体的に生きがいという言葉が意味することはどのようなことなのであろうか。神谷の解釈を見てみると、生きがいとは、生きがいの源泉ともいわれる生きがいの対象を指すものと、生きがい感ともいう生きがいを感じる心の状態を意味するものから成立しているととらえている。具体的には下記に示したとおりである。

表 1. 生きがいの源泉（生きがいの対象）

- ①生存充実感への欲求を満たすもの
- ②変化と成長への欲求を満たすもの
- ③未来性への欲求を満たすもの
- ④反響への欲求を満たすもの
- ⑤自由への欲求を満たすもの
- ⑥自己実現への欲求を満たすもの
- ⑦意味への欲求を満たすもの

神谷（1980）の示した生きがいの源泉より筆者が作成

一方、生きがい感とは、生きがいを感じる心の状態を意味するもので、自分の生存は何のため、またはだれかのために必要であるか、自分固有の生きていく目標は何か。あるとすればそれに忠実に生きているか、自分は生きている資格があるか、そして、一般に人生というものは生きるのに値するものであるのかという問いを示している（神谷,1980）。

近年の生きがいに関する研究の傾向として生活満足度から高齢者の生きがいの把握を行う研究（古谷野,2003）や、幸福感を尺度を用いて分析する研究（近藤・鎌田, 2003）がみられる。では、幸福感と生きがいは、どのように違うのであろうか。神谷の定義によると、「生きがい感」は幸福感の一種であるがニュアンスの差がはっきりとみとめられ、生きがい感には幸福感の場合よりも一層はつきりと未来にむかう心の姿勢がある。たとえば、現在の生活を暗たんとしたものを感じても、将来に明るい希望なり目標なりがあれば、それへ向かって歩いて行く道程として現在に生きがいが感じられるのである」と述べている（神谷,1980:28）。そこで、本研究で明らかにしたいことは、やはり幸福感ではなく、あくまでも生きがいであることが明確になった。

### Ⅲ. 研究方法

対象者ひとりあたり1～2時間程度の半構造化インタビューを実施した。面接場所は対象者の自宅、勤務場所（保育所）で行った。インタビューは対象者の許可を得て録音し逐語録を作成した。データは、保育者としての生きがいに関して語られている箇所を抜き出して、そのなかから共通するキーワードを抽出し分析、考察した。

調査時期：2008年7月～12月

調査対象：国内17都道府県の元保育者32人（全員が定年まで保育者として勤めている。現在も現役で保育所勤務の者も含む）。全員女性。

平均年齢：77.21歳で、その内訳は、80代11人・70代16人・60代5人である。

### Ⅳ. 結果

#### 1. 分析結果と分類

インタビュー調査の語りのデータを読み込み、文脈に気をつけながら、生きがいについて語っている部分を抜き出していくと、32人から合計で52の事柄が抽出された。その52の事柄から重複した内容や同じ意味を示していると考えられるものをまとめていくと、24のサブカテゴリーに集約できた。その24のサブカテゴリーから、さらに多く語られていた項目を検討した結果、最終的に保育者としての生きがいの構成要素として、下記の図に示した5つに分類することができた。分類するにあたり、Ⅱ章の先行研究で示した、表1.生きがいの源泉（神

谷,1980) と, 見田の示した生きがいの基礎的な条件(見田,1970:120-125)を参考にした。

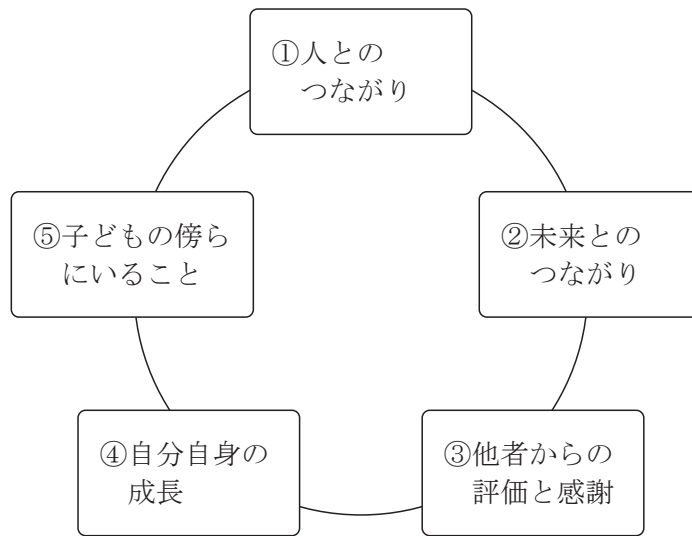
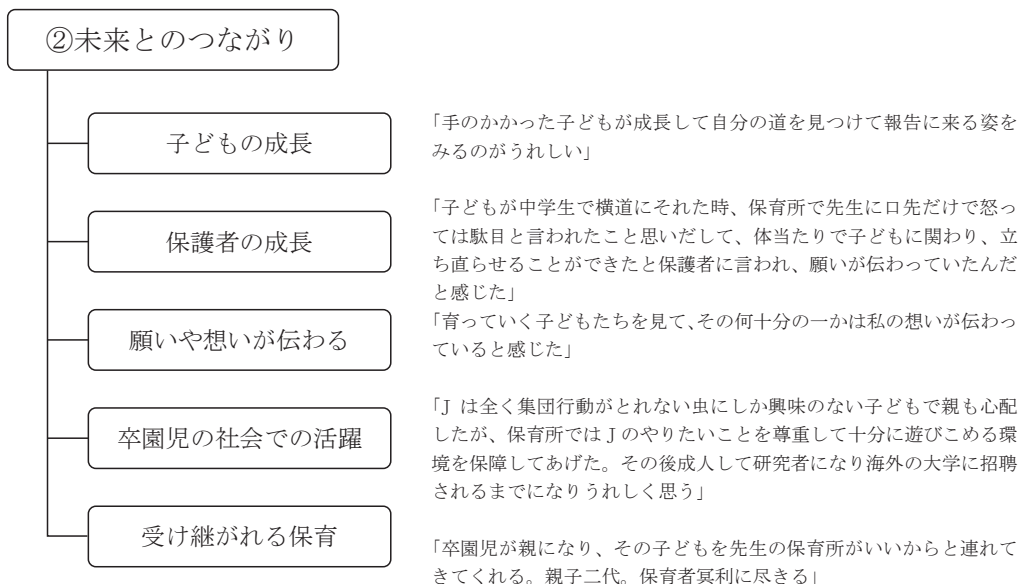
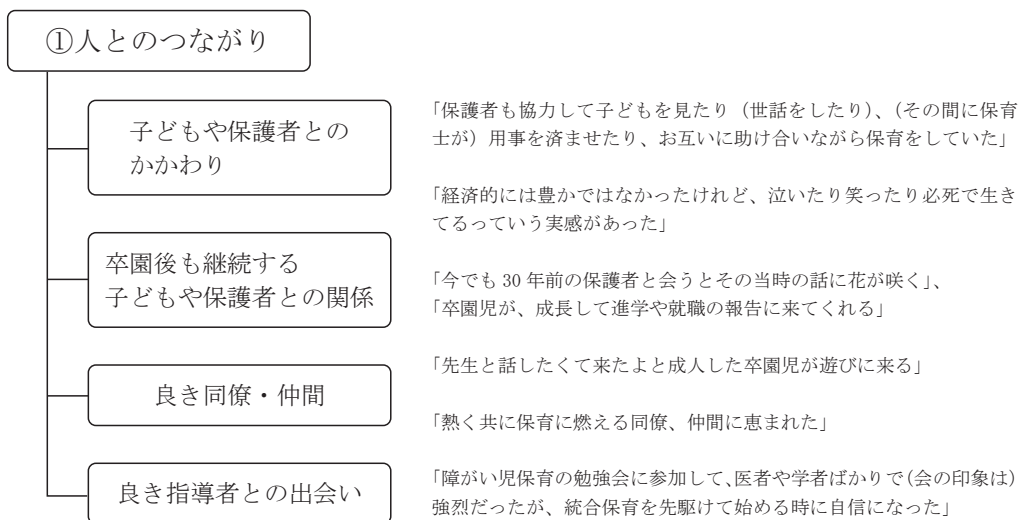


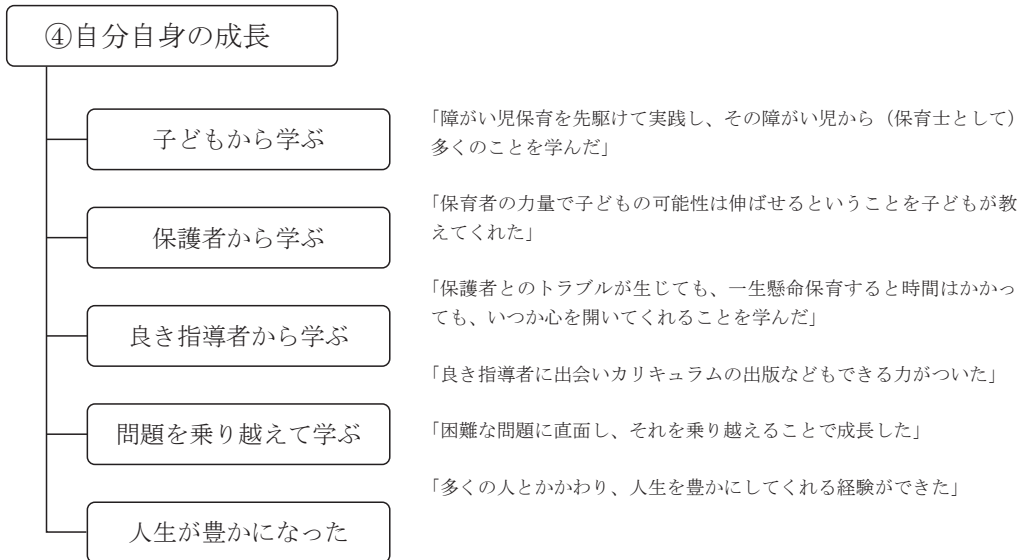
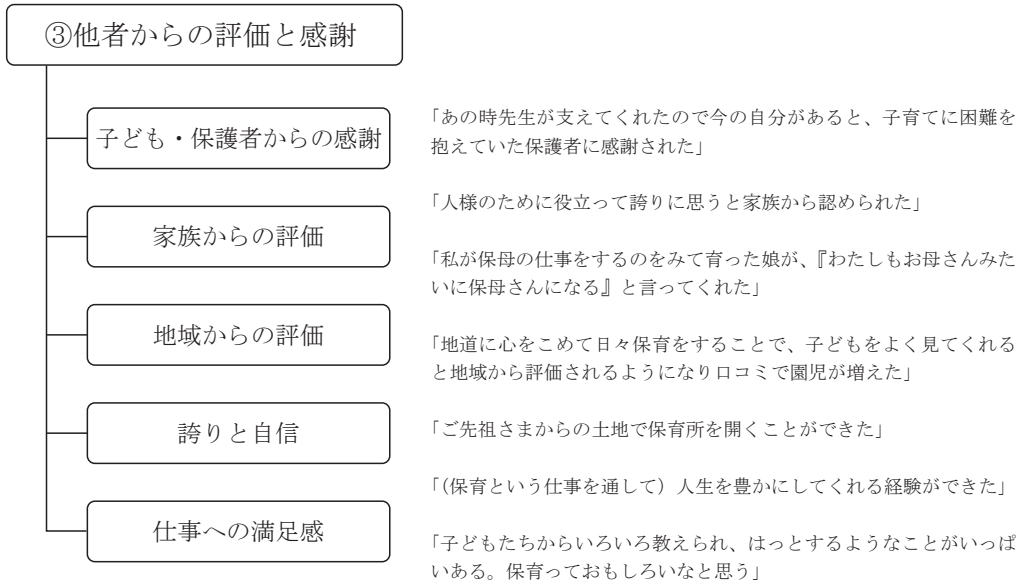
図1. 保育者としての生きがいの5つの構成要素

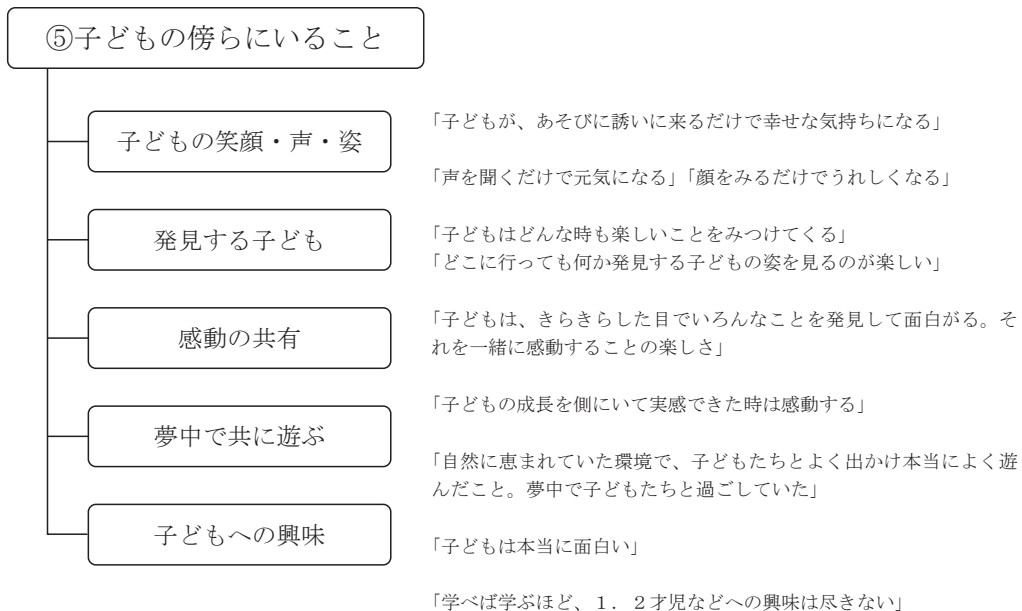
## 2. 生きがいの5つの構成要素

5つに分類した内訳をみていくと, 32人中最も多く25人の対象者が語っていたことは, 「卒園児が成人した後も保育所を訪れる」という卒園児やその保護者との継続した関係についてであった。これらは, 「人とのつながり」というカテゴリーに分類した。また同じく25人が卒園後も卒業, 就職, 結婚の報告を受け, その成長を共に喜ぶことや, 自分と同じ保育所に通わせたいと自分の子どもを親子二代にわたって通わせてくる保育所との関係性, 保育者の思いや願いが卒園後も彼らの心のなかに息づいていることなどについては, 「未来とのつながり」というカテゴリーに分類した。

対象者20人が示した保護者からの感謝や18人が語っていた自分自身の保育という仕事を通しての成長については, それぞれ「他者からの評価と感謝」「自分自身の成長」というカテゴリーに分類した。その他, 保育者ならではの事柄として, 17人が語っていたことは, 「子どもと共に遊び発見や感動する楽しさ」, 「笑顔, 声など, その存在自体に癒される」などで, これらについては, 「子どもの傍らに居る」というカテゴリーに分類した。以下にまとめて示す。







### 3. その他

32人のインタビュー対象者のなかで、1人だけBさんは「生きがいは、ないですよ」と語っていたが、その前後の文脈のなかで、人との出会いや、保育の仕事を通して自分自身が我慢強い人間になったことが語られ、「多くの人に支えられ30年（保育者として）過ごしました。本当にわがままな幸せな（自分）でした」など、人とのつながりや、自分の成長、保育者という仕事への充実感を読み取ることができた。

また、①職業選択当時の理由、動機（約7割は積極的理由ではない、残りの約3割は自らの意思で保育者という職業選択をした）や、②居住地域（都市と地方）、③年齢（60代と80代）という3つのクロス集計を試みたが、差異はみられなかった。

その他特筆すべきことは、今回の調査において32人の生きがいに関する語りのなかに、お金などの経済的要因は全く見当たらなかったということである。

## V. 考察

先に示した元保育者の語る生きがいの5つの構成要素の分類をもとに分析していくと、これらの5つのなかでも、25人という最も多くの対象者が示した保育者としての生きがいは、「つながる」という人とのかかわりに関することであった。

まず1つ目は「人とのつながり」である。保育は人とのかかわりのなかで人を育てる仕事である。保育者と子どもや保護者との日々の丁寧なかかわりなくして保育は成り立たない。また、保育者ならではのつながりと言えるのは、卒園児や、その保護者とのかかわりが、卒園後も続



いてゆくということである。Cさんの保育所の卒園児R子は、思春期になり家庭に問題を抱え自殺をも考えるようになった。そんな時、ふと自分の一番楽しかった頃をたどり、ふらっと保育所を訪れた。R子が「先生私のこと覚えている」と聞くと、Cさんが「Rちゃんでしょ。美人に成長したね」と答えた。「覚えていてくれてありがとう」とR子は喜んだ。また、保育所に展示された写真に幼き頃の自分を見つけてうれしそうにしていた。「先生、私が結婚して子どもが生まれたらここに連れてくるね」と約束するとR子は帰って行った。家庭に問題を抱え、居場所を見失いそうになっていたR子にとって、Cさんが名前を覚えてくれたことや展示された写真に自分の姿を見つけたことは、卒園ということでは切れることのない人とのつながりを実感できたのであろう。R子はその後、本当に結婚して子どもを連れて保育所を再度訪れている。卒園児が成人した後に結婚して家族を連れて遊びに来ることや、卒業や入学の折りに触れ成長を報告しに訪れる。卒園児の成長を喜ぶとともに、その成長をみることで保育者自身の充実感と「この仕事をしていてよかった」と職業選択が間違っていなかったことを確信するのである。

次に2つ目は「未来とのつながり」である。子どもたちが保育所で経験したことは、卒園した後も彼らの成長とともにさまざまな形で心のなかに生き続ける。つまり保育者の保育実践が、子どもたちの成長とともに未来へとつながってゆくのである。また、子どものみならず保護者にも、卒園後の子育てにおいて保育者の助言を思い出すなど、保育者の思いや願いが他者に伝わり、卒園後もその教えが生き続けていることに喜びを感じている。このことは、たとえ自分自身はいなくなったとしても、その精神は未来に引き継がれていくことを実感する。つまり保育者の生きてきた証が、人びとの心のなかに宿り続けるということである。

そして3つ目は、「他者からの評価と感謝」である。保育の仕事は、はっきりとした形で成果が見えるものではなく、すぐに結果が出るという性質のものでもない。いわば評価されにくい仕事といえる。しかし親身になって子どもと保護者に寄り添い日々の保育を大切にすることで他者から評価を受けて感謝される。認可外保育所を開設したEさんのケースをみてみると、小児麻痺の障がいを持つK親子がEさんの保育所へ入所を申し込みに来た。しかし、1970年代当時、障がい児保育の知識がなかったEさんは、自信がないので断ろうと考えていた。ところがKは、障がいを理由に近隣のすべての認可保育所に断られていたのである。その事情を知りEさんは、手探りで障がい児保育に取り組みK親子を援助することを決心したのであった。その後、卒園してしばらくしてから、中学に進学した時にK親子が大きなケーキを持って保育所を訪れ、「あの時、この保育所が私たち親子を受け入れてくれなかったら自分たちに現在ではなかった」と感謝し成長したKの姿をEさんに見せに訪れたのである。当時は、今ほど保育所において障がい児の受け入れ態勢が整っていないことから、K親子のように保育所への入所を断られることもあったようだ。さぞKの母親は失意のどん底にいたことであろう。しかし、そこに手を差し伸べてくれた保育所があり、援助してくれた保育者がいたことは、その後のK親子の育ちを支えた大きな1歩であったに違いない。Eさんの保育所はその後、認

可を受けた。よく子どもをみてくれると地域から評価されている。保育の仕事は早急な成果はみられないことも多いが、長い時を経た後に感謝されることも少なくない。また、地域社会から認められ良い評価を受けることにより、保育者という仕事の社会への貢献を自覚し、さらに自分の存在価値を見いだすことができるのである。

4つ目は、保育を通して保育者が「自分自身の成長」を自覚することである。Bさんは、「いろいろな家庭や人に出会うことで人として成長する」と語っている。

保育所では、子どもの保育のみならず保護者の支援も重要な職務である。多様な価値観を理解し、困難を抱えた保護者と接することも少なくない。保育者は、様々な支援をしていくなかで自分の価値観や常識だけでは対応できないことを知る。相手を受容することや、自分と異なるものを理解することなど、保育者は日々鍛えられる。挫折やトラブルを経験し乗り越えたとき、自分自身の成長を実感するのであろう。また、「障がい児保育を先駆けて実践し、障がい児から多くのことを学び成長した」と語っているように、援助を必要とする子どもをケアすることで、その子どもから自分が学ぶことも多く成長していくということもある。これは、Mayeroff（1987）が、ケアがいかに人生に意味を与えるかについて述べているように、相手の成長を助けることによって自分自身も成長して自己実現を遂げていくという考え方と合致している。

最後に5つ目として、「子どもの傍らに居ること」についてであるが、特に戦争による苛酷な体験をした元保育者は、子どもという存在自体に安らぎや平和を感じている。「子どもが、あそびに誘いに来るだけで幸せな気持ちになる」「子どもの声を聞くと元気が出る」など、その存在自体が喜びを与えてくれるという。一方で保育者ならではの子どもの持つ特性をすぐ傍らで共に過ごす中で感じていることがわかる。「めずらしいものを見つけて喜んだり、子どもとともに発見することが楽しい」「子どもと一緒に感動したことが忘れられない」「どこに行っても楽しみを見つける子どもの姿を見るのが楽しい」「子どもは本当に面白い」「子どもの成長をすぐそばにいて実感できる」「子どもから宝ものももらったと思う」というように、子どもの最も傍らで共に過ごす保育者は、子どもの成長や発達に目を見張り、発見を喜び、子どもから思わぬことを教えられる。変化と成長が著しい子ども、未来へとつながる子ども、自由な子ども、その存在は生きがいの源泉となり得る豊かな条件を備えている。

## VI. おわりに

戦後を生きてきた元保育者たちは、生きてきた時代背景からも理解できるように、女性の就労率は男性に比べて半数以下と低く、職業選択の幅は広くはなかった。そのような時代に、きっかけは何であれ保育者となり一生懸命与えられた仕事に取り組み経験を重ねていくなかでその仕事のなかに生きがいを見出していたことが明らかになった。見田は、「いまここにいる生きる自分が、このような未来と他者に向かって自己をなげかけることをとおして、その未来と他

者から意味を獲得することこそが〈生きがい〉の固有の実体にほかならない」と述べている（見田,1970:179）。元保育者の語りからも、保育者という職業、子どもという存在は、まさに見田の示す生きがいの実体を体現できるものであるといえよう。保育者の生きがいの特徴として生きがいの中身をみてゆくと、すべて人と人のかかわりのなかから見出されたものであるということが分かった。今後は、他の職業における生きがいとの比較をすることにより、保育者の生きがいの特徴がより一層明らかになると考えられる。

## 参考文献

- 吹野卓・片岡佳美（2009）. 生きがいとは何か—中山間地域の課題としての生きがいづくり再考—. 社会文化論集 5,19-28
- 古谷野亘（2003）. 幸福な老いの研究. 新社会老年学. ワールドプランニング
- 法政大学大原社会問題研究所編（2000）. 日本労働年鑑第 24 集 1952 年版. 時事通信社 <http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/rn/24/rn1952-004.html>
- 岩崎美智子・松本なるみ（2009）. 女性たちの職業選択—元保育者の語りから—. 日本保育学会第 62 回大会発表論文集
- 神谷美恵子（1980）. 生きがいについて. みすず書房.
- 古城幸子（1977）. 回想を語ること・聞くことの高齢者ケアにおける意味 臨床看護研究の進歩 9
- 小林司（1994）. 生きがいとは何か. NHK ブックス
- 近藤勉・鎌田次郎（2003）. 高齢者向け生きがい感スケール（K-1 式）の作成および生きがい感の定義. 社会福祉学第 43,93-101.
- Lawton,M.P.（1991） A Multidimensional view of quality of life. In.E.Birren, J.E.Lubben, J.C.Rowe, & D.E. Deutchman（Eds.）, The concept and measurement of quality of life in the frail elderly（pp.3-27）.New York :Academic Press.
- Mathews.G.（2001）. 人生に生きる価値を与えているものは何か - 日本人とアメリカ人の生きがいについて -.（宮川陽子）. 三和書籍
- Mayeroff.M.（1987）. ケアの本質（田村真・向野宣之訳）. ゆみる出版
- 見田宗介（1970）. 現代の生きがい—変わる日本人の人生観—. 日経新書.
- 宮城音弥（1971）. 日本人の生きがい. 朝日新聞社
- 西村純一（2005）. サラリーマンの生きがい対象の構造, 年齢差及性差の検討. 応用社会学研究 47,143-148.
- 和田修（2001）. 近代社会における自己と生きがい. 生きがいの社会学. 弘文堂

## 謝辞

元保育者の先生方の聞き取り調査へのご協力に心より感謝申し上げます。

## 付記

\* 本研究は、科学研究費補助金の助成を受けて行われたものの一部である。（基盤研究（C）「戦後日本における保育者のライフヒストリーに関する研究」課題番号 20530748 研究代表者：岩崎美智子）  
（2010.10.6 受稿, 2010.11.8 受理）

